

[3] 研究開発単位Ⅲ「SOZAN 国際塾（詳細）」

(1) 1年間の取組

月	主な取組
4	新入生歓迎会でのプレゼンテーション
5	第6回ひろしまジュニア国際フォーラム, 岡山大学 SDGs アンバサダーミーティング, 課題研究研修会 (GW 課題)
6	テーマ設定に関する講義
7	ビジネスプラン作成講座, Design Your Future 2021, 高校生のための SDGs@HANDAI, グローバルスキルトレーニング, Sacred Heart College(オーストラリアの姉妹校以下「SHC 高校」という)オンライン交流会
8	おかやま SDGs プラザ夏の交流会 2021, SHC 高校オンライン交流会, 岡山大学留学生オンライン交流会, 課題研究研修会 (研究計画書の作成)
9	松柏祭でのポスタープレゼンテーション, 2021FALCon 高校生国際会議@Mishima, オープンスクールでのプレゼンテーション, オンライン特別講演会, 高校生のための SDGs@HANDAI, グローバルスキルトレーニング, 岡山大学留学生オンライン交流会, 課題研究研修会 (課題研究の進め方)
10	グローバル合宿, 留学促進バーチャルフェア 2021, , 世界市民への挑戦～国際ボランティアプログラム～, 高校生のための SDGs@HANDAI, グローバルスキルトレーニング, 岡山大学留学生オンライン交流会, 課題研究研修会 (課題研究の進め方)
11	グローバルスキルトレーニング, 岡山大学留学生オンライン交流会
12	全国高校生フォーラム, 課題研究中間発表会, 高校生探究フォーラム 2021, INTERKIDS ESD Café URA 2021, グローバルスキルトレーニング, 岡山大学留学生オンライン交流会
1	グローバルスキルトレーニング, 岡山大学留学生オンライン交流会, 海外研修代替プログラム, 玉島高校主催第3回探究活動プレゼンテーションアワード [延期]
2	SOZAN 国際塾ポスターセッション, Well-being フォーラム事前セミナー, 岡山大学留学生オンライン交流会
3	海外研修代替プログラム, 京都大学ポスターセッション 2021, 未来航路課題研究発表会, Well-being フォーラム, グローバルスキルトレーニング, SHC 高校オンライン交流会

(2) 取組実践

「持続可能な開発目標(SDGs)」における17の目標に基づいたテーマで課題研究を行った。意欲ある生徒を対象に、幅広く深い教養, 課題発見・解決能力, 新たな価値を創造する力, 主体的に行動する力, 他者と協働する力, 自他を尊重する力の6つの資質と能力を身につけ, グローバル社会で活躍できる生徒を育成するために, なるべく多くのインプットやアウトプット, フィードバックの機会を生徒に与えるように様々な活動の機会の提供を図った。校内では課題研究の進め方に関する講座を節目節目に開催し, 研究のプロセスやリサーチクエスションの設定の仕方, 研究計画書の作成の仕方, 情報収集・分析の仕方, 倫理的配慮に関する注意事項の確認等, 課題研究を進めていく上で必要な知識・技能を習得する機会を設けた。また, 未来航路の時間を利用して研究の進捗状況を担当教諭に報告・フィードバックを受ける機会を設け, 進捗状況をこまめに確認するように努めた。

新型コロナウイルスの影響を受け、これまではできていた活動や外部との折衝が大いに制限される中でも、Classroom を通じて積極的に情報発信を行い、活動を絶やさないように工夫した。大学や関係機関等が主催するイベント・プログラム・発表会等に計 13 件、のべ 80 名以上の国際塾生が参加した。また、校内研修会の機会も大いに拡充させることに成功した。外国人教員によるグローバルスキルトレーニングを年間通じて 12 回程度実施し、英語運用能力のさらなる向上を図った。また、オンラインを通じて SHC 高校や岡山大学の留学生との交流会を行い、国際交流の機会も絶やさないように努めた。これに加え、校内外での発表の場への参加も積極的に促し、課題研究の成果を外部に向けて発信することで、社会に貢献することにつながることを伝え続けた。他校の生徒や教職員、大学関係者や各種業界・企業で活躍しておられる方々からフィードバックをもらい、それらをもとに客観的に自身の課題研究を見直し、深化させるに至った。また、参加後には振り返りを書かせることで、自身の体験や学びを整理した上で次に活かすことができるようにした。

(2) - 1 校内での取組

(ア) 校内研修会の充実

今年度はこれから課題研究を始める 1 年生を中心に、課題研究の進め方に関する校内研修会の機会を複数回にわたって設けた。GW の期間を利用し、SDGs の 17 の目標に関するレポート課題を課してそれぞれの興味・関心を引き出し、その内容をもとに校内研修会を節目節目に開催した。課題研究と調べ学習の違い、課題研究のプロセス、リサーチクエスチョン・仮説の立て方、研究計画書の作成の仕方、調査・分析方法、倫理的配慮に関する注意事項等を講義形式で説明し、研修の中で用いたスライド資料を、Classroom を通じて配信し、必要に応じて振り返りができるようにした。また、リサーチクエスチョンの設定に関するレポート及び研究計画書の作成をオンラインで行わせ、Classroom を通じて担当教員と綿密にやりとりをしながら取り組ませた。新型コロナウイルスの影響で直接的なやりとりができない部分をオンライン形式で補うことで、これまで以上に丁寧にフィードバックを返すことが可能になった。

(イ) オンラインを通じた国際交流の機会の拡充

今年度は新型コロナウイルスの影響を受け、SHC 高校との直接的な交流は叶わなかった。しかし Chromebook を活用し、夏休み期間を利用して計 4 回にわたり、オンラインでの交流会を開催した。前半は互いの学校生活や個人にかかわること、文化等を話題に交流を重ね、後半は課題研究の内容について意見交換をする機会を設けた。また、SHC 高校のみにとどまらず、岡山大学の留学生とのオンライン交流会も年間 10 回にわたり実施した。初回は留学生の出身国について学ぶ機会を設け、2 回目以降は各グループが取り組んでいる課題研究の進捗状況を伝え、フィードバックをもらう機会を得た。自身のことや取り組みについて英語で説明する機会を通じ、英語運用能力の向上を図るとともに、グローバルな視点から課題研究に向き合う大変有意義な機会になった。

(ウ) グローバルスキルトレーニングの実施

今年度も引き続き 6 つの資質能力向上及び、英語力の向上のためグローバルスキルトレーニングを実施した。今年度は年間通じて 10 回以上にわたる講座を開催し、各回において 10 名以上の国際塾生が参加した。本校のネイティブの英語教諭により、グローバル人材やグローバルスキルとは何かを考えさせる回や英語で楽しく文化について学ぶ回、英語の文献の探し方・読み解き方、英語でのディスカッションの進め方等、国際塾生の資質能力向上のため、毎回多岐にわたるトピックで実施した。

	月 日	内容
1	7月12日(月)	ICTの使い方について 姉妹港との交流会準備
2	10月4日(月)	自己紹介, ディスカッション「グローバルスキルとは[1]」
3	10月18日(月)	ディスカッション「グローバルスキルとは[2]」
4	11月1日(月)	ディスカッション「グローバルスキルとは[3]」
5	11月8日(月)	国際機関のデータから見えてくる課題分析と英語発表[1]
6	11月15日(月)	国際機関のデータから見えてくる課題分析と英語発表[2]
7	11月22日(月)	国際機関のデータから見えてくる課題分析と英語発表[3]
8	1月17日(月)	視野を広げる: 在日本外国人が向かっている課題
9	*1月24日(月)	英語で資料の調べ方, 英語で参考文献の書き方
10	*2月7日(月)	各自の課題研究の概要を英語で発表する

※第9回・第10回は延期

(2) - 2 外部との連携

(エ) 外部発表会への参加

今年度は新型コロナウイルスの影響で様々な活動・発表の場が制限される中でも、毎年参加している高校生国際フォーラムを始め、FALCon 高校生国際会議@Mishima, おかやまSDGsプラザ夏の交流会, 高校生探究フォーラム, 京都大学ポスターセッション, 第3回探究活動プレゼンテーションアワード, Well-being フォーラム等, 多くの発表の場に恵まれ, 課題研究の成果を外部に向けて発信することができた。発表の機会を通じて自身の課題研究を見直し, ブラッシュアップする機会になっただけでなく, 他校の生徒からも大いに刺激を受け, 考え方やものの見方を広げることができた。

①全国高校生フォーラム

12月19日(日)にオンライン形式で開催された全国高校生フォーラムに2年生3名とアジア高校生架け橋プロジェクトの留学生1名が参加した。参加した生徒の発表テーマは、「A Program to Promote Understanding of Sexual Diversity: Class Development for Lower-Elementary-School Students」であった。小学生を対象に性的マイノリティに対する理解を深めるための授業の教材及び指導案を作成した。当日はプログラム前半に, 事前に撮影した発表の様子を配信し, 関連分野ごとに分かれたグループでディスカッションを行い, 最後に生徒交流会を行った。生徒たちはこの日のために, 何度も研究内容を精査し, 修正と練習を重ね, 入念に準備を行った。入賞こそは逃したものの, 他校の生徒から「実際に自分たちのグループも性の多様性教育における指導案を作りたいと考えているので, 参考にしたい」, 「自分たちも類似した問題意識を持っており, 幼いうちからの性的マイノリティに関する教育の重要性という部分で大いに共感でき, 改めて自分たちの研究を見直すきっかけとなった」等というコメントが集まった。



[全国高校生フォーラム 発表要約]

・日本語テーマ

性の多様性の理解促進プログラム～小学校低学年を対象にした授業展開～

・日本語要約

LGBT 当事者であると気付いた年齢は小学校低学年が多く、性自認の確立前の小学校低学年からの性の多様性教育が必要であると考えた。また、小学年を対象にした性の多様性の授業は性の多様性への理解を深める効果があるという結果も得られている。私達は小学低学年を対象にした性の多様性の授業の学習指導案を作り、独自の授業展開を作成した。その結果、生徒の8割以上が性の多様性の意識が高い状態になることを目指している。

・英語テーマ Title

A Program to Promote Understanding of Sexual Diversity: Class Development for Lower-Elementary School Students

・英語予約 Outline

The point at which young people realize that they are LGBT is frequently in the early grades of elementary school, so we believe that sexual diversity education is necessary from then, before sexual identity is established. In addition, real-life examples suggest that teaching sexual diversity to elementary school students has been effective in deepening their understanding of it. We created an original study plan for a class on sexual diversity for lower-grade elementary school students, with the hope that more than 80% of the children taking the class will gain a high awareness of sexual diversity as a result.

②おかやま SDGs プラザ 夏の交流会

8月4日(水)に開催されたおかやま SDGs プラザ夏の交流会に2年生より1グループが参加した。自身の課題研究の内容を、大学教授、多くの企業人に向けて発信し、専門家の立場から課題研究に対して指導・助言をもらう大変良い機会となった。また、他校の発表を聞き、自分たちにはなかった視点を得ることにもつながった。

[参加した生徒の感想]

他の学校の生徒がSDGsについてどのような取り組みをしているのか知ることができてよかった。実際に学校を出て調べているので、とても説得力のある発表をした学校が多かった。やはり発表に説得力を加えるためには、自分たちで動くことが大切だとわかった。私たちのグループはデータ分析の段階だったため、データに説得力を持たせるために主催者や利用者へのインタビューや運営の状況を見ることが必要だと感じた。写真等で説明できるように学校外の活動も積極的にやりたい。

③高校生探究フォーラム

12月27日(月)に開催された高校生探究フォーラムのポスターセッション部門に2年生1グループ、プレゼンテーション部門に2年生が1グループ参加した。2年間にわたって行ってきた課題研究の成果を他校の生徒、教職員、大学教授、専門家等を前に発表した。発表後には活発な質疑応答が行われ、自身の研究の意義や今後の展望を見つめる大変良い機会となった。発表後に寄せられたアンケートには、多角的な視点から研究がなされていること、独自で計算式等を用いながら説得力のある発表ができていたことを評価する多くの声が寄せられた。

[参加した生徒の感想]

研究を通して結局何がわかったのか整理できていなかったことが明らかになった。改めて考えると、電力消費量が最も少なくなるときの外の環境の体感温度だったと思う。データが何を示すのか、考えながら研究をする必要があった。また、エアコンの設定温度は何度がいいのか、ということは今回調べられていないので、それをはっきりと認識しておく必要があった。今後、エアコンや扇風機、服の厚さを場合分けし、体感温度と電力消費量の関係をシミュレーションをするとさらに研究ができると考えた。また、今回は岡山市での関係性に焦点を当てていたが、北海道や沖縄等、気候が異なる地域についても考えていきたいと考えた。

質問や議論を通して新しい見方を知ったり、私の無知さを実感したりしたので、とても有意義な体験となった。

一方、初めて聞く人に対して研究成果を伝えることの難しさを感じた。ポスターの内容を話してはいたが、伝わっていないのがわかった。その原因は漢語の表現が多かったことや、体感温度と気温等、似ている言葉が多かったこと、話すスピードが早かったことだと考えられる。よって、最暖月ではなく8月と言ったり、体感温度と気温の区別をはっきりと示したりするようにしたい。

④京都大学ポスターセッション

3月12日(土)に開催された京都大学ポスターセッションに2年生1グループが参加した。自身の課題研究の内容を、参加した全国の高校生、教職員、大学教授の前で発表した。普段は関わることのできない他県の生徒との交流を通じて、課題への様々なアプローチの仕方、社会問題を知るきっかけとなった。

(オ) 大学との連携

10月16日(土)、17日(日)の二日間にわたり、一昨年度同様、関西学院大学の協力のもと、グローバル合宿を開催した。一昨年度までは関西学院大学にて8月の夏休み期間を利用して行っていたが、今年度は新型コロナウイルスの影響を鑑み、10月に時期をずらして本校及び岡山県立図書館、プラザホテルにて実施した。関西学院大学において実際に行われている「国際情報分析」を、講義や実習、発表等を通じて学んだ。初日は、本校にて大学教員による国際情報分析の方法及び意義についての講演をいただいた後、テーマ別に3つのグループに分かれ、グループごとに大学教員・大学院生の指導のもと、岡山県立図書館及びプラザホテルを会場にChromebookや書籍を利用して調査・分析・発表資料の作成を行った。二日目は本校にて分析・発表準備の続きを行い、午後にはグループごとにスライド資料を用いたプレゼンテーションを行った。最後にグローバル合宿に携わってくださった大学教員2名、大学院生1名から指導・講評をいただいた。本合宿を通して、一つの物事を多角的に見ることの重要性を、実践を交えながら学ぶことができ、大変充実した二日間を過ごすことができた。

[詳細]

1 期 日 令和3年10月16日(土)～17日(日) 【一泊二日】

2 場 所 岡山県立岡山操山高等学校(LL教室)
岡山県立図書館(岡山市北区丸の内2-6-30)
岡山プラザホテル(岡山市中区浜2-3-12)

※新型コロナウイルス感染症予防のため、1人1部屋を使用して宿泊

- 3 参加者 生徒：SOZAN国際塾の塾生のうち希望者（15名）
教員：SOZAN国際塾担当教員（平松・デイビッド・柴田）
外部講師：関西学院大学国際学部 關谷 武司 教授
高崎経済大学地域政策学部 吉田 夏帆 助教
関西学院大学国際学研究科 博士前期課程 南 優希 院生
- 4 目的 「深い探究による情報の分析」をテーマに、外部講師による講義や、仲間とのディスカッションを通して、課題研究を深化させる。また、本校の育成すべき「6つの資質・能力」の向上を目指すものとする。
- 5 日程
- 10月16日（土）
- 9:30 生徒集合@LL 教室
- 10:00～11:30 演習（LL 教室）
- 11:30～12:30 昼食（昼食後に岡山県立図書館に移動）
- 13:00～17:00 演習（岡山県立図書館）
- 17:00～18:00 岡山プラザホテルチェックイン
- 18:00～19:00 夕食
- 19:00～22:00 演習（適宜入浴）@ホテルの会議室
- 22:00～23:00 発表準備（準備が終わった人から就寝）
- 23:00 就寝
- 10月17日（日）
- 7:00 起床・身支度
- 7:30～ 8:30 朝食
- 9:00～11:30 発表準備（LL 教室）
- 11:30～12:30 昼食
- 12:30～15:00 発表，質疑応答，相互評価，講評（LL 教室）
- 15:30 解散

[参加した生徒の感想]

< 1. 講義・演習を通じて学んだこと・感じたこと >

- ・日本はよい伝統を持っている反面，世界と一線が引かれた場所にあり，日本人の話し方では海外の会話の中に入ることができないということは衝撃的でした。情報を待つのではなく，どの情報が必要か判断し自ら掘みに行かなければいけないと思いました。その際にきっかけとなった疑問は特別なものではなく，日頃思っていることばかりでした。チャンスはもう既に目の前にあり，私の本当の課題はそれをどう検証するかということだと気付きました。5アクションによって，自分でも自分なりの仮結論までたどり着いたというのには驚き，今後の課題研究の自身にもなったように思います。
- ・今まではニュース等を見て，与えられている情報を知ろうとすることもしなかったけど，先生のお話を聞いて生きている知識を自分で広げていくようにしていきたいと思いました。毎朝ボーッと見ている新聞さえも鵜呑みにするのだけでなく，能動的に背景や隠されている真実に近づこうとする姿勢を持ち続けたいと思いました。
- ・最初に「批判的思考」についての話を聞いたとき，日本人の情報の鵜呑み度の高さにとっても驚いた。私も先生に聞かれたとき，特に深く考えずになんとなく情報は合っている

と答えたため、なんだかショックだった。その後の先生方との研究で、先生方のものの見方に驚いた。アドバイスを頂いて改善していくたびに良い内容になっているのが実感できた。

< 2. 発表を通して学んだこと、感じたこと >

- ・疑問が解決することと、それを人に伝えられることは、全く別のハードルでした。順番によっても、言い方によっても、聞き手の解釈のされ方が変わってしまうので、本当に大変でした。そのため、たったひとりでも発表中に頷いてもらえた時は一安心でした。最初からすべて言おうとするのではなく、これだけはということから厳選することが整理のコツだと気付きました。また質問時間を利用するというのは驚きでした。今回調べたことやポイントを完全に伝えきれなかったのは心残りです。ただ知識を共有するのではなく、それを繋ぎ合わせるプロセスまでを伝えて初めて理解してもらえたことになるので、自分の思考回路を整理する等して発表が上手になりたいと思います。
- ・半日というすごく短い時間の中で、難しい問いに対して十分に答えることができるのかとても不安でした。しかし、仲間や先生と協力しながら過程を踏んで追究学習を進めていくことで膨大なデータの中にも矛盾や疑問を見出すことができ、最終的にはとても深いところまで調べて考察ができた発表にすることができたと思います。自分たちの力でここまでの理解を深められたことが嬉しかったです。
- ・ただ研究をするだけでは意味がなくて、自分がその内容についてきちんと正確に理解し、疑問点や自分の見解を理解していないと他人につたえることは難しいとすごく感じた。
- ・自分が一生懸命に調べたところは原稿が無くてもこんなにもスラスラと話すことができるのだと驚いた。この発表の経験をこれからの未来航路の発表に活かしたい。
- ・調べたことをもとに自分たちで考える能力はこの合宿で大きく向上したし、考え方も少しは分かったと思う。このことはこれからの課題研究に役立つと思う。またこの情報をどこから引用してきたのかをはっきりさせていくことの重要性がわかり、自分が調べていった辿りを記録していこうと思った。メディアのすべてを信じすぎないことは日常生活においてニュースや情報を得るときに役立てていきたいと感じた。

< 3. グローバル合宿で得たことを今後の課題研究や日常生活にどのように活かすことができるか >

- ・分かったつもりになって片付けるよりも、悩んで本当のことを探し出した時の方が遥かに「片付いた」という感じがしました。(自分の思う仮)真実を知っているというのは、この先を見通してベストな判断をするための武器になると思いました。それはつまり、自分の理想を叶えることにも、誰かのために生きることにも繋がっているはずです。また、揺らがない自分の生き方を見つけることにもなるかもしれないと思います。勉強は手段ではないと本当に強く思いました。考えることは生活そのものだと学ぶことができよかったです。情報ひとつひとつを関連させて聞くことをまずは意識して、そこから疑問点を出せるようになっていきたいと思います。
- ・私はだいたい発表のときは原稿を用いて発表するのですが、今回は自分なりに全力で調べ、しっかりとした調査に基づいて深い理解を得ることができたので、何も見ずに説明することができて、本当に驚いたしこの成功体験は自分の力になると思いました。この力は学習面でも大いに役立つと思いました。例えば、難しい数学の問題や国語の問題も自分で十分に理解してわからない人に説明できるほどの理解までいけば、確実に自分のできる範囲としてその問題が身につくと思います。
- ・私達はこの結果をゴールとしているというように、最初からはっきりとした未来を描いてしまうと、そうでなかったときのショックが大きかったり理想の結果にするために有利な情報ばかりを集めてしまうようになってたりする。それは正しい研究とはいえない

い。そのことを今回経験したので、本当に正確なのか、他にもデータはないのかと常に疑うのを意識して研究に取り組みたいと思う。

- まさに学校で行っている課題研究において、調べたいことが果てしなく広がっていった情報だけが増えていくばかりで困っていたが、今回勉強した順番に整理していくことで自分たちが結局何を言いたいのがわかりやすくなった。根拠やデータを示す順番も論理的に組み立てられるようになった。
- 今後の課題研究では、まず基礎知識をたくさん増やす必要があると思った。テーマにすぐ直結しようとするのではなく土台をしっかりと作るイメージをもつのが大事だと思った。日常生活では、誰かがやってくれる精神ではなく私がしなければ！というふうに考えようと思う。
- 今回のグローバル合宿で私は特に「自分で考える」力を身につけることができたと思う。この力はこれからの自分たちの課題研究だけではなく勉強の中でも生かしていけると思うので、今回学んだことを忘れずにこの知識を使っていきたいと思った。
- 表面の情報を鵜呑みにしていくのではなく、内部までしっかりと探りを入れて嘘の情報に惑わされないように注意することが重要なのだと感じました。今後の研究課題においての調査でも同様に情報を鵜呑みするのではなく、自分たちでしっかりと噛み砕いてより正確な情報を集めることのできるようにしたいと思います。



(カ) 海外との連携

① 姉妹校交流

今年度は新型コロナウイルスの影響を受け、直接的な交流を行うことはできなかったものの、オンラインを通じてオーストラリアにある姉妹校の SHC 高校との交流を行った。今年度の交流会は7月～8月にかけて計4回行い、ZoomのBreakout Roomという機能を活かし、少人数で双方向のやりとりができる環境を整備した。国際塾生全員とSHC高校の中・高合わせて22名の日本語学習選択者と活発に交流を行った。自己紹介や互いの国についての理解を深めることからそれぞれが取り組む課題研究の内容に関する情報交換等、話題は多岐にわたり、英語と日本語を交えて有意義な時間を過ごすことができた。事後に行ったアンケートの結果によると、「非常に良かった」と回答した生徒の割合は7割以上であった。記述式回答において、「とても良い交流ができたのでもっと話したいと思った」という感想を持つ生徒も複数いた。また、「コミュニケーションがよくとれた」と回答した生徒の割合は8割以上で、「この交流会はなぜ良かったと思うのか」という問いに対し、「実際に外国人と英語で話せた」・「異文化について学ぶこと」・「友だちができた」という回答が多く挙がった。

[日程・内容]

	月 日	内容
1	7月20日(火)	本校生徒による自己紹介(英語) 日常会話(相手を知るQ&A)(英語)
2	7月27日(火)	SHC高校の生徒による自己紹介(日本語) 日常会話(相手を知るQ&A)(日本語・必要に応じて英語)
3	8月17日(火)	本校生徒による自分の課題研究テーマの説明と質疑応答(英語)
4	8月24日(火)	SHC高校の生徒による自分の日本文化についての研究テーマの説明と 質疑応答(日本語・必要に応じて英語)

②オーストラリア・スタディ・ツアー代替プログラム(海外研修代替プログラム)

昨年度に続き、今年度も新型コロナウイルス感染症のため海外研修を中止とした。この代替として、事業協働機関であるベネッセコーポレーションと協働し、次のような宿泊研修を柱としたプログラムを計画した。このプログラムのポイントは、現代アートを鑑賞し、そこから課題設定、そして成果をグループで制作したアート作品を用いて発表するところである。

1 目的
(1) 参加生徒が現代アートを体験し、そこで体験するアートの意味や役割を考えるとともに創造力と主体的な活動、課題発見・解決能力を実践する。
(2) フィールドワークを通して他者と協働する力を養う。
2 対象
1・2年生希望者24名
3 日程・内容
(1) 説明会
① 日 時 令和4年1月13日(木)
② 場 所 本校会議室
③ 内 容 自己紹介、プログラム説明、班決め
(2) 事前学習Ⅰ
① 日 時 令和4年1月20日(木)16:45から1時間程度
② 場 所 本校会議室
③ 内 容 ベネッセアートサイトについての講義(英語)
④ 講 師 ベネッセアートサイト直島 ステンランド由加里 氏
(3) 事前学習Ⅱ
① 日 時 令和4年1月22日(土)9:22宇野港発～17:35宮浦港発
② 場 所 ベネッセアートサイト直島
③ 参加者 1・2年生希望者24名、教員3名
④ 内 容 生徒を6名×4班で編成し「地中美術館」「ベネッセハウスミュージアム」「李禹煥美術館」「家プロジェクト」の見学。昼食は弁当持参。
(4) 校内活動
事前学習Ⅰ・Ⅱを通して、各班で宿泊研修に向けて課題設定や事前準備を行う。
2回程度、進捗状況の報告会

(5) 宿泊研修

- ① 日 時 令和4年3月9日(水) 9:22 宇野港発～3月11日(金) 16:02 宮浦港発
- ② 場 所 ベネッセアートサイト直島
- ③ 参加者 1・2年生希望者24名(4名×6班で活動), 教員3名
- ④ 内 容 9日(水)～10日(木)夕方 課題解決に向けたフィールドワーク等の班活動
10日(木)夕方～11日(金)10:00 発表準備
11日(金)10:00～12:30 発表・質疑応答(英語)
11日(金)12:30～13:30 昼食
11日(金)13:30～15:00 講評・まとめ
- ⑤ 宿泊先 9日(水):つつじ荘 10日(木):ベネッセハウス
- ⑥ その他 各班に1名のネイティブのコーディネーターがつきます。

(6) 校内活動

- ① 宿泊研修での助言を参考に研究内容を深化させ、姉妹校の教員・生徒に対し研究成果を発表(英語)する。
- ② 本校の教員・生徒に対し研究成果を発表(英語)する。

しかし、事前学習Ⅰを実施できたが、新型コロナウイルス感染症により以降のプログラムは中止となった。宿泊研修部分の代替を検討している。

[事前学習Ⅰについて]

英語で直島に関する講義をいただき、直島が辿ってきた歴史、アート作品、島民の様子、ベネッセとの連携の在り方について学んだ。講義後には質疑応答の時間をいただき、多くの生徒が英語で質疑を行った。直島の特徴とアートプロジェクトの概要を知り、社会的なアートの役割、アートが何を伝えようとしているかを考え、理解し、各自がどのような作品を作成すれば直島に相応しく、社会的に有意義になるのかを想起させる機会となった。



[事前学習Ⅱについて(中止)]

「地中美術館」「ベネッセハウスミュージアム」等のアートを鑑賞し、そのアート作品が作成された背景・経緯・伝えようとしているメッセージ等を考察。その後は、班ごとに課題を設定し、定期的に担当教員へ進捗状況を報告しながら、フィールドワークの計画、各班で作成するアート作品を考察する予定であった。

[宿泊研修について(中止)]

各班にネイティブコーディネーターがつき、課題解決に向けた班活動(アート作品と発表用プレゼンの作成、使用言語は原則英語)を行い、アートを用いて成果発表・質疑応答・講評(英語)を行う予定であった。

③岡山大学留学生との交流会

昨年度に引き続き、岡山大学の留学生との交流会をオンラインにて実施した。今年度は、岡山大学の留学生の4名と年間10回にわたり交流を行った。留学生の出身国はトリニダード・トバゴ、ケニア、タイ、ミャンマーである。初回は各留学生から英語で自己紹介と自国文化等に関する紹介がなされ、異文化理解の機会とした。生徒たちは留学生のプレゼンテーションに対して英語で質問し、当該国とその文化について学びを深め、視野を広げることができた。第2回以降は、SHC高校との交流会と同様、ZoomのBreakout Roomの機能を活かし、3グループに分けて少人数で交流を行った。生徒は自身が行っている課題研究の内容について英語で留学生に説明し、留学生からの指導・助言を受けた。実際に大学で研究を行っている留学生たちからグローバルな視点で課題研究に対する助言をもらえる大変貴重で有意義な機会となった。留学生との交流に関しては、1つのグループが複数の留学生から意見をもらえるようにするために、3回ごとにローテーションを行った。生徒たちは毎回ディスカッションの初めに、課題研究の進捗状況を報告した。課題研究を深化させる上で大変良い機会になった。なお、第7回までは予定通り実施したが、それ以降は新型コロナウイルスの影響のため、延期にしている。



[日程・内容]

	月 日	内容
1	8月6日(金)	岡山大学留学生による自国紹介と生徒による質疑
2	8月20日(金)	ステージ1, 第1回 課題研究を紹介し, 質疑対応・意見交換・助言
3	10月22日(金)	ステージ1, 第2回 課題研究の変更・取り組みに対する意見・助言
4	11月5日(金)	ステージ1, 第3回 課題研究の変更・取り組みに対する意見・助言
5	11月12日(金)	ステージ2, 第1回 課題研究を紹介し, 質疑対応・意見交換
6	12月17日(金)	ステージ2, 第2回 課題研究の変更・取り組みに対する意見・助言
7	1月14日(金)	ステージ2, 第3回 課題研究の変更・取り組みに対する意見・助言
8	1月21日(金)	ステージ3, 第1回(延期) 課題研究を紹介し, 質疑対応・意見交換
9	2月7日(月)	ステージ3, 第2回(延期) 課題研究の変更・取り組みに対する意見・助言
10	2月14日(月)	ステージ3, 第3回(延期) 課題研究の変更・取り組みに対する意見・助言

④留学関係

拠点校において、アジア高校生架け橋プロジェクトによる留学生をマレーシアから1名受け入れた。1年生に在籍し、古典（3時間）以外の授業を受講し、古典の時間は、日本語の取り出し学習を行った。未来航路の課題研究は、SOZAN 国際塾の生徒と「中学校での性的マイノリティの理解の深め方」をテーマにグループ研究を行い、全国高校生フォーラムに参加したり、茶華道部に入部し部員からお手前を学ぶ等積極的に活動を行った。岡山県教育委員会の「岡山の高校生留学支援事業留学生受入支援」を利用して必要経費（制服や体操服、教科書等）を支援した。

WYSによる留学生をドイツから1名受け入れる予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響で来日が難しい状況となった。

また、管理機関が設定する「岡山の高校生留学支援金」制度を利用し、9月から約1年間チェコ共和国へ長期留学（1名）をしている。現地学校のクラス生徒と本校生徒のオンライン交流会を計画している。

（2）－3 様々な外部講義への参加

今年度は岡山大学 SDGs アンバサダーとして21名の国際塾生がオンライン等を通じて行われる各種イベント、講演会、ディスカッションに参加した。これに加え、ビジネスプラン作成講座、Design Your Future、ひろしまジュニア国際フォーラム、オンライン特別講演会、高校生のための SDGs@HANDAI、留学促進バーチャルフェア、世界市民への挑戦～国際ボランティアプログラム～、INTERKIDS ESD Café URA 2021等、多種多様なイベントに多くの国際塾生が積極的に参加した。どのイベントも第一線で活躍する専門家から直接学ぶことができ、具体的な課題を与えられ、それについて考え、発表する等、受け身で聴講するだけではなく、自ら能動的に関わっていく中で社会の諸問題を自身の課題として考え、それらの機会を通じて考えたことを自分の言葉で発信する機会となった。6つの資質能力の向上に大きく貢献する内容であった。

（3）成果と課題

（ア）成果について

各種イベント・発表会ごとに回答してもらったアンケートやレポートの結果を見ると、今年度の多くの塾生が、各種イベント・発表会等を通じて幅広く深い教養を身に付けることができたという回答している。自分に取り組んでいる分野に関する知識はもちろん、課題研究の内容とは必ずしも直接リンクすることはなくとも、自身の興味や関心に応じて様々な情報収集、研修の機会を利用する中で、新たな教養を身に付けることができた。また、校内外をはじめ、他者との協働を通して自他を尊重しながらも主体的に行動し、リーダーシップやフォロワーシップを養うことができたという報告も、複数の行事を通じて挙げられている。積極的に他者と関わったり、人前で自分の意見を発信したりするのが苦手な生徒も、立場や考え方の異なる多くの人々と一つの課題に協力してアプローチしていく中で、自分の役割を見出し、その環境に自然と参画していくことができたという報告も述べている。他者とかかわっていく中で、社会で問題になっている課題を見つけ、複数の情報をもとに解決策を導いていく力や社会的事象に対して新たな価値を創造する力を身に付けることができたという報告する塾生も多い。

今年度も昨年度に引き続き、新型コロナウイルスの影響で様々な行事が延期・中止になり、活動の機会が制限される中でも、オンラインのイベントを中心に継続的な情報発信を行い、活動を絶やさないようにした成果が表れているのではないかと考える。また、Classroom を通じて情報発信や担当教員とのやりとりをすることで、時間や場所の制約を受けることなく密度の高いやりとりを行うことができ、手厚い指導につなげることができた。これに加え、今年度は

13 件以上の行事にのべ 80 名を越える国際塾生が参加し、学校での活動だけでは得られない経験や刺激を得ることができた。グローバル合宿での貴重な体験を始め、多くの外部の講義への参加等が功を成したと考えられる。さらに、今年度は校内外において昨年度よりも多くの発表の機会を与えることができ、それに合わせて研究を進め、グループで発表の整合性を確認し、発表からのフィードバックを得て、内省し、研究を深めるという良いサイクルを作ることができたことも6つの資質能力の向上に貢献できた。社会的な問題について自分のこととして考える傾向も見受けられ、どの塾生も社会貢献の意識を身につけることができたと言えることも今年度の大きな成果といえる。

(イ) 課題について

国際塾生に対して研究を行う際、安易に校内でのアンケートやインタビュー等に頼るのではなく、信憑性のあるデータを複数集め、根拠をしっかりと示すことのできる論理的説得力のある研究を行うこと、データの出典を確認し、複数の情報から多角的な視点で情報分析を行うことを指導してきた。論文の検索の仕方や海外の文献の探し方についても指導する機会を設け、自分たちが考えた仮説や結論とは相反する結果が得られたとしても、それらに真摯に向き合うことの重要性を伝えてきた。そのため、インターネットや文献からのデータを使う際、情報源を確認しながら複数の情報を突き合わせて研究に生かしていくことができている。

今後の課題としては、新型コロナウイルスの影響でフィールドワークやインタビュー、実験等の外部機関と連携した研究が十分にできていないため、オンライン等を効果的に活用しながら研究の糸口を探っていく必要がある。また、自分たちで作成した成果物や分析した結果を、学校内で完結させるだけではなく、専門家のもとに持って行き、評価や指導・助言を受けるといった取り組みもこれまではあまり行うことができていないため、実践していく必要がある。また、情報を分析する場面で、様々ある分析方法のうち、どの方法を用いて分析を進めれば良いのかが分からず、苦戦している様子が見られたり、せっかく収集した情報をうまく分析したりことができずに、自身の課題研究に十分に活かすことができていない場合もあった。今後は分析方法について指導する時間を拡充し、実践や演習等を通じて適切な分析方法を身につけさせていく必要があると考えられる。